

第1回「科学のひろば」の報告

7月13日水曜日、鹿児島大学附属図書館、水産学部分館のセミナー室で、第1回「科学のひろば」が開催された。テーマは「英語教育の現実解としての『英語の見える化』」であり、報告者は板倉隆夫氏（鹿児島大学名誉教授・特任教授）であり、参加者は13名であった。「現実解」とは普通の日本人が英語がわかるようになるための現実的な答えというような意味であり、「英語の見える化」とは英語の文章の構造・しくみを、記号を付加することによって見えるようにする＝わかり易くするということであった。以上のことは話を聞く中で次第にわかって来たことである。

板倉氏は日本の大学生は英語がわかっていないということから話を始め、この「英語の見える化」によって英語がわかるようになったという水産学部の学生の話をした。

ついで、英語と日本語は大きく異なる言語であり、とくに構文と品詞の理解が不可欠であると強調された。

さらに、英語と日本語の言語的隔たりは大きく、英語がSVO型言語のひとつであるのに対し、日本語はSOV型の言語のひとつであって、とくに次のふたつが最も重要であるとされた。そのひとつは名詞＋形容詞の構文であり、もうひとつは他動詞＋目的語の構造であると言う。わかりやすい例をあげれば、前者の例は **an apple on the table** であり、後者の例は **I kick a ball** である。この際、英語は語順の言葉であることを強調されたことも印象に残った。

話の後半には「英語の見える化」記号一覧という資料とiPadが各人に配布され、実際に文章の構造に従って記号を入れていって、英文を理解する作業を行った。

例として使った英文の内容は「はだかの王さま」と「日本国憲法の前文」であった。

資料が大変わかり易くできており、「はだかの王さま」のほうは面白くてよくわかったが、「日本国憲法」のほうはとても長い文章で、難しい部分もあったが、英語の構造を理解するという点ではとても良い例であるように感じた。

質疑・討論では

- ・英語教育のやり方が昔と今とでは変わっているのではないか。
- ・近年は品詞や構文は教えられていないのではないか。
- ・今の学生は英語が読めない
- ・われわれは効果的でない英語教育を受けてきたのではないか。

などの意見が出された。

日本語と英語の最も異なる点を前述の2点に整理し、この徹底的な体得こそが英語がわかるようになる秘訣であるとする板倉氏の考えは的を射ているように思われ、英語はスポーツと同じと言う話とあわせて、この理屈ではない感性的な体得に勤めたいと思った1日であった。

(田島康弘)